

蜷川幸雄

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

公開対談シリーズ第9回
NINAGAWA 千の目

宇崎竜童

作曲家

初夏の暑い日、6月17日の第9回にやって来てくれたのは、熱い言葉を抱えて登場した宇崎竜童さん。数々の舞台での共同作業の現場の秘密。それは言葉にせずとも分かり合える固い信頼関係だった。

あれだけ「いい」と言ったのに、次の日「宇崎、総とっ替えしてくれるか」(笑い)

心底分かり合える何かがあるから、曲が生まれた

蜷川 (以降N) 宇崎竜童さんと僕は随分前から一緒に仕事をしていますが、たくさんわがままを言って、たくさん曲を作ってもらいました。そのうち使ったのは何割かなので、きっと僕のことを怒っていると思います。

僕は余り演劇や芸能の人では友人がいませんが、その数少ない友人が宇崎さんです。実は宇崎さんからはたくさん物もらいました。もらったというよりは強奪した。(笑い) 一番初めに会ったときに、彼はニコルのすてきなモスグリーンのコートを着ていたんです。僕が「ああ、いいな」と言ったら「ああ、欲しい?」と言ってパツと脱いでくれました。「かっこいいな」と思っていて、遠慮なくていいのかと。宇崎さんは著作権料がたくさん入ってくるので、自分よりはるかに金持ちだよなと思いき、それ以来会うたびに「ああ、いいな」と言っています。(笑い)

宇崎 (以降U) よろしく、どうも。

N 俺らの一番初めの仕事は何だろう?

U 『にぎり江』ですね。

N これは僕の真ん中辺の演出作品では割と傑作だと思っています。そのきっかけになったのは宇崎さんの曲を聞いて、「犬

の遠吠え……」というのがあるでしょう。

U あれは『身も心も』。

N ああ、『身も心も』という曲があって、それがすごくよかった。「あ、宇崎さんに曲を頼もう」と思ったんです。浅丘ルリ子さんが主役で、樋口一葉のいろいろな物語から、それを一つの本につくり上げて出来た、たくさんエピソードがある芝居です。

例えば少年との愛情を封じて、おめかけさんになってしまう『別れ道』という芝居、それから『にぎり江』もそうですね。いろいろな思いをみんな封印して、そういう自分の思いを断念していくような。そういう物語を作ることで、女性たちに対する独断の鎮魂歌を作りたいなと思っていました。それは月の路地裏に集まる人々で、月が青々と輝く夜にそういう女たちが何かを断念しながら生きていくという話をやろうと思って、宇崎さんに曲をお願いしたわけです。それがよかったの、ね。

U そんなによかった? (笑い) こういう説明をあのときしてくれればいいのにね。俺は今でも覚えているよ、東宝の宝塚劇場の事務室だったから蜷川さんが言うんだ。

「階段状のいろいろな家々の明かりが見える。月がグワーツと出てくる」俺が「それで?」と聞くと、「いや、そういう歌を作っ

と何かわかる。でも、僕は詞を書く人間ではないので。

N 阿木さんに詞を書いてもらった。

U でも、おっしゃったとおりの女の気持ちを詞にしていましたね。

N 『十六夜小夜曲(いざよいセレナーデ)』。

U そうです、そうです。あれはいい歌だと自分で作ってていましたね。

ちょっと日本人の音楽家として、いわゆる西洋の音楽に影響ばかり受けてきた西洋かぶれがちょっとアスファルトを剥がして、土の匂いをかいでみようかなというような。あの頃は、ちょうどそんな時期にいました。だから、ああいう日本的なメロディーを書くことに対して何の抵抗もないというか、逆にいい素材をいただいたなと思ったんです。

N そうやって宇崎さんとはいいかげんな、「いいから作って」とか、そんな感じで作ってもらってました。宇崎さんは早くて、芝居の稽古が始まる前にある程度、6割ぐらいは「じゃあこれを聞いてみる?」と言ってくれる。それで僕がいろいろ選ぶのですが、使わない曲が出ると「使わない」といって怒るのです。(笑い)

稽古がはじまると、何を言い出すかわからない

U すごいことがあったね。シェイクスピアの役者さんたちがロンドンから来た、真田広之君だけが日本人俳優でやる『リア王』という芝居だ。あれは僕は忘れもしない。渋谷のジャンジャンというところでライブをやっていたら蜷川さんがやって来て、もうとくに渡してあったその音楽を「いいじゃないか」と言っていたのに、コンセプトが変わったとか言い出したんだ。蜷川さんは「全部違う。キューンとかカーンとかキヤーンとかドヒヤーンとか」とその時言ったが、俺はそういう作曲家ではないんだよね。「タララララララ」という五線譜の中に、譜面が見たら舞うように小さい音から大きい音、低い音から高い音まで存分の五線譜を使うというメロディーメーカーなのに、「ガン、ドン、ガチャーン」とか…。(笑い)

でも、やるのだよ。やるのはおもしろいから。やっぱり自分のフィールドが、これで「何?」といってやめてしまったらそういう仕事をしなくなってしまう。それと俺と蜷川さんは何か前世でも、「オーラの泉」みたいになるけれども何か因縁があるような気がする。(笑い)俺は前世で借りがあろうと思う。相当面倒を見てもらったと思う。

N 俺は貸しがあるんだ。(笑い)

『リア王』は、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーでやったナイジェル・ホーソンが主役の芝居でしたが、僕が想像していたより彼の英語の音がちょっとくぐもっていた。僕の『リア王』はもう少し感傷的なリアなんです。声がくぐもっているから鮮烈にならない。そうすると甘いのです。そうすると竜童につくってもらった綺麗な曲が叙情を上塗りしていくわけだ。実のところ「ああ、だめだな。何でこんな声が評判がいいのだろうか?」と思っていた、今言ってしまう。(笑い)俺は耐えていたので、それで竜童のところへ行って「ああ、だめだ。キン、コン、カン」と。(笑い)

曲をボツにされる。でもそれは意味があり、生き返る

N 井上ひさしの『藪原検校(やぶはらけんぎょう)』という芝居をこの間終えたばかりです。

U それは歌がうまそうな役者さんが余りいなかった、申し訳ないですけど。だからやっぱり余り高い音域や音の幅が広い歌をつくれないうと思って取り組みました。ギター1本と井上さんの脚本に書いてあるし、多分ギター1本でということだろうと。「昔の本でも何でもください」と言って手に入れて、あれはほとんど半年前にお渡ししましたね。そのときも「いいじゃない、これ」と言っていた。しかし全然信用していなかったけれど。(笑い)それが、稽古に入って2日目でしたね。

N 何?

U 「あれ全部チャラにして」と言いましたよね。

N 言っていないよ。

U 言ったよ。「やり直しだ」と本当に言ったの、2日目に。何て薄情な人だろうと。でも、その予測はしていたから。チャラということは1から出直しですから。ただ、芝居もやっぱり蜷川さんの場合は本当に1からやっていますよね。1というか0からですね。だから、それを毎日見ていてその中で、もしその中でこちらにいろいろなものが入ってきたら、きっとそれが栄養になって歌をもう一回つくり直せると思っていたので、全然不満はありませんでした。

N そういえば不愉快そうな顔をしていた。このまえの『藪原検校』は結構大変でしたが、井上ひさしさんのだから歌が多いんです。確かに余りうまい人がいなかった。

だけど本当だよ、使わなかった曲を集めたらすごいいね。いいのが残っているかもね。

U 多分それは、蜷川さんのところについている音響さんがいるじゃないですか。この人が全部ストックしていますよ。蜷川さん本人はお気づきかどうかわかりませんが、例えば新作を作ります。そうすると蜷川さんが「ああ、そうじゃない。もっと違うな、もっとこうだな、井上、違う」とか言うじゃない。そうすると音響さんの井上君が昔のもう忘れていたやつを復活させてくれたりしている。蜷川さんはそれを「ああ、いいじゃないか」と。

だから、俺は新作なのにあれ、俺は作ってないぞというのが時折入っていますよ。それは多分そういうものをストックして、蜷川ライブラリーに入っているんだと思うんだ。

N 懲りずに今後ともよろしく願います。(笑い)



宇崎竜童(うざきりゅうどう)
京都生まれ。1973年にダウン・タウン・ブギウギ・バンドを結成しデビュー。「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」など数々のヒット曲を生み出す。作曲家としても活動を続け、「思い出ほろぼろ」(1976)で日本レコード大賞作曲賞、「駅・STATION」(1981)などで日本アカデミー賞優秀音楽賞を受賞。2006年、「ロック曾根崎心中」と蜷川幸雄演出「天保十二年のシェイクスピア」の音楽で、第13回読売演劇大賞優秀スタッフ賞受賞。現在は、アーティストへの楽曲提供やプロデュース、映画、舞台音楽の制作や俳優として、幅広く活動中。